





## けいじばん

## ◇運動部◇

**硬野部** バット振り、柔軟に一時間、足の鍛錬のためランニングを一時間の練習をやつしている。冬休みには練習時間を増し、強度な方法をとつてするつもりでいる。

**陸上部** 足のあげかた、手の曲げかた等の基礎的練習。ナフ飛びで足首の強力を強化。柔軟体操、駆け足。

**剣道部** 前月の二十日の昇段試合で下のように段をとつた。二段木内直幹、伊藤正夫、越前屋幸臣、田中善明(以上三年)工藤忠男(一年)初段牧野尚義、金子公洋、田村正広、泊川良之(以上二年)加賀輔(一年)

八部がふえて九人になつた。

**籠球部** フットワークの完成、バス、戦法の工夫、ウサギ飛びで足の力を強くする。

去月三十日、市内四高の新人戦が行われ、本校は三位になつた。試合はあとクリスマス大会。

**体操部** まず、種目に慣れ、且つ、それを完全にマスターする事を目標に体力増進に励んでいる。併せて忍耐精神も養成中。

**スキー部** 県北大会の通知はまだない(十二月三日現在)が、これから参加行事は、一月十四日ニツ井で行われるカーニバル(米代クラブ主催)、下旬の全県大会(於花輪)がある。それまで足腰に鍛錬ておく。

**排球部** 前衛ジャンプ力の強化と、後衛フットワークの完成を目指し、柔軟フッキングを続行している。

冬期練習に入つている。体をホグすため、柔軟体操を中心にして「裏技」に主眼をおいてやつている。

**W L 部** 練習時間は、約二時間位とり、不得手な面を伸ばすようしてい

るが、当部全体の欠点としては、力があつてもテクニツクがないことが悩み、冬休みは体力増進を目的に下半身にウェイトを置いてやつてゆく。

## ◇文化部◇

**弁論部** 当部は部員が五名で、すべて辯論を同好する人たちの集まりである。先回行なわれた校内辯論大会は、本校生の辯論に対する熟意を見るために試みられたものであつたが、非常に良い結果を得た。今後は少なくとも学年内に一、二回の小さいながらも大会を開催し、全校生の辯論意識と辯論部の発展を目指している。

**科学部** 生物班ではコロニーの研究をはじめ、物理電気班はラジオ作製に全力をあげている。往々は無観局開設を目指している。地学班では毎日毎日の気象観測および、毎週土曜日の夜には星の観測も行つていている。先月の火星接近の時は二、三年生の模試のため一年生が行なつた

種目の競技は、とくにボンツをあれども、走りは、とにかくボンツを走る。走りは、とにかくボンツを走る。

## 柔道個人は渡辺君(1A)

が、中止になったことに

も、応成功したように思

れる。運行されていた野球

が、多くの血を流かせるといつ好効

果があるものだが、この点今年度

も多くの血を流かせるといつ好効

果があるものだが、この点今年度

# 人生無情



抱持した。ここまで思い浮べて私はじつに笑う。初夏の夕日が青々と緑の水田の間に現れる。赤い夕焼けが浩然とゆらいでいた。柔道大会が終って帰る途中である。遙か峰々がほんのりと雪雲をたたえ、山脈が淡い紫雲にかすむ。見える小川のせせらぎには、靈ふさとの地陸むすびに、童心の船が、やわらかな木口舟をなで、山が樹が、夕空が、自然でくれた。「自然が私を癒してくれた。こんな幸せがまたあるういる。こんな幸せがまたあるういる。」

「良一よ強くなれ、

町野と別れて門の前まで来ました。弟の義美が「兄ちゃん、お父さんのが」「お父さんはどうしたんだね、怒られたのか」怒られないなんかのもんが。お父さんはおまわりさんと連れていかれたんだよ」「えー何故だい」「義美ちゃん、知らんもん」……あの立派な父がどうして文藝雑誌なんかに……「いつも

「コアー」という場内の歓声で、東西両校の大将が今、雄々と矢張りの控えから登場相対した。「全くイントハイ柔道大会決勝〇〇県予選……両校の応援団は独立していながら、ガタスを飲んで見守つてゐるが、審判のシンと太鼓に人は東西に散つた。然爾者は余りにもあっけなく、裁量も兩校応援團も勝負の判定を眼をそつた。審判の右手が高々と舌を指している。そうだ、西校の虎、山川一郎の大外刈が一瞬で、あらざるかに決いた。しかし然るとしていた大外刈も豪傑も、次の瞬間耳を震わせた。ばかりの拍手と歎声に変つた。この一勝によって、西校は晴れの全員が少なからずそう思った。

その時、「山川待つてくれよ。」

「オ一西校の虎。」声と同時に同じくラスの町野が走つてきた。「勝敗おめでとう。」

「どうぞ、」虎。」

「まだ品だせ。」「いや、それはほんでもないよ。」「誰選ばよ、こゝまで君の大外刈は確かにすごい。」「ども君にかかるつちや……」「あははは……西校の虎も我愛にかかるやハリコの虎かな」「なあには……」「一人は互いに何故とも笑つた。町野はさすがに何故ともよつと名のれた建設業者で、長男でこの町の有力家の息子だった。

情

木哲也

次の部屋の睡子をもじるか  
のフスを開けた時、そこに倒れ  
静かに床に向かって対座して  
いた。口中に何かつぶやきながら  
私は何とか強いて庄坦め  
たよくながして敷居の所へいた  
と坐つてしまった。幾分かの不  
安がローリクの光と共に昇りだした  
北側の林木がこよなた、この暗  
い部屋ローンクの光だけ間に  
浮かん見え、仏殿があやしく金  
色に輝き、暗い森林の奥深くより  
日々斜め赤々と小道を照らしていく  
た。

時計がせいよく七時を示す。  
やがて一時、母は静かに向面圓  
じに腰を下す。大衣をほみ  
取る。社長の意に自分の分  
前進をもよおして、

良の前を歩く。わづ  
と強い人間に付く。良の  
父をめるして。……町の  
主が、県会議員の名で審議會  
私はいた武者之外に出た  
の町を一望して、この住  
ぐ夜の霧氣に懸念を擡げて  
いた。畢竟せりやの大  
海の孤島に大きいかね寄す  
はしがつて、私の小心には  
そして胸済から然然と湧きあ  
波に身がすっぽり飲まれた  
気がした。

「これが人生か

……でも父は同罪を犯さ  
らなかつたのです……そ  
して胸済から然然と湧きあ  
波に身がすっぽり飲まれた  
気がした。

走れメロス

二年 翁 藤 良 子

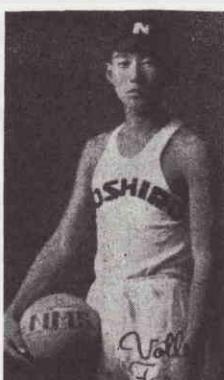
心の彼方へは、底草者  
娘の七日に大きなままで、月  
える。これが神から  
杯ならば、よしんば  
くても殺されぬ飲み  
ばいがな。…………  
いた私の心へ、再び今  
反射して手を染めゆる  
せ。まじ。まう  
人生無情なり。こ……

言ひ換れば、人間を信  
いうことを実感として味わ  
すかしい  
である。だがそれと同時に  
どうかとの因縁をも実感  
味わなればならないが  
メロス。あなたは風り  
い。さしまでもを信した  
信、正義のめに戦った  
間ひとと生れた人の  
ことにして、私はま  
美うござなれ。

がなか  
水乱じん  
思ひなかつたんだ。  
セリヌンティエットの友情も  
の誠実さを欠いたまは成立しな  
し、美しくもない。セリヌンティエ  
ウスがメロスの娘を殴り、メロ  
セリヌンティエットの娘を、互  
ちうつの間で殴合わなか  
つての理由で殴合つたのである  
聞えども。どんなに快い響を  
つた力強い音だつたのに。空港  
こだましたことだらう。  
メロスナ、あなたは、あな  
を書いてくれた人の想像豊かな  
作者はどんな人に作られたかっ  
とが。それでも物語が信じ  
せないままだったのだ。そして  
しみ、苦しみの果てに自らの手  
自らを断つたのだ。

で苦きただたく持音にスイ互  
良く学び・良く遊べ  
洋品百貨  
菊 宏  
TEL. 793  
萬年筆  
ヤ  
363

# 我が青春



タダ焼けたが終つて帰る途中でいた。水田の間に長い尾を引き、赤い煙突火が長く尾を引いていた。遠く峰々がほんのりと白雲をなじみ、山脈が淡い紫色にかすんで見える。小川のせせらぎも、露ふきの音も、さわやかなメロディーしか、山が空気で、自然存するもの全てが静か、歌い喜んでくれた。「自然が私を保護してくれる。こんな幸せがまたあるうしてお警察なんかに……」つづく。

町野と別れて門の前まで来ると、萬の義夫が「兄ちゃん、お父さん、お母さん、どうしたんだい？」が、「お父さんはどうしたんだい？」怒られたのか」「怒られないか」と、さうやからず尋ねた。おもんか。お父さんはおまわりさるもんか。お父さんはいたたまきで、運んでいたかれたんだいまさうへん。何故だい、「義ちゃん、どうも」と、あの立派な父が、

“良一よ強くなれ”

「ワーア」という場内の歓声で、東西校の大将が今、雄々と矢を射てから差進す。〔全員一同〕「山川待て。」  
（オーライ西校の虎）声と同時に、同  
士気沸騰……西校の応援団は練習  
した、觀衆もガタスを歓んで見守る  
いる中で「始め」。審判のリン  
と大喝に「人は東西に散った。  
然、勝負は余りにもあつけない、  
觀衆も両校競技も勝負の判定を  
頭をさすった。審判の右手が高々  
と振る。西校の虎、山川一段の猛烈な大外刈が  
一瞬に、そしてあざかに決して  
いた。しばし騒然としていた応援  
団も觀衆も、次の瞬間耳を塞ぐ  
ばかりの拍手と歡声に変った。こ  
の一勝によって、西校は晴れの全  
か」次第に幕に行く夕景を眺めて  
は少なからずそう思った。  
その時、「山川待て。」  
（オーライ西校の虎）  
「グラスの町野が走って来た。」「  
優勝おめでとう」「いや、あり  
がとう」「君の大外刈はすごいな  
や」「それほどではないよ」「競選はよだまく  
君の大外刈は確かにすごい。」「  
も君にかかるや……」「あは  
は……西校の虎も我慢にかかる  
や。ハリコの虎かな」「な」あ  
らかに、町野はこのまま走り去  
て笑った。町野はこのまま走り去  
よつて名の売れた鍵巻の勇  
で、この町の有力家の息子だった  
私の父も彼の会社に勤めていた。

情

木哲也

次の部屋の睡子をもじるか  
のフスを開けた時、そこに倒れ  
静かに床に向かって対座して  
いた。口中に何かつぶやきながら  
私は何とか強いて庄坦め  
たよくながして敷居の所へいた  
と坐つてしまった。幾分かの不  
安がローリクの光と共に昇りだした  
北側の林木がこよなた、この暗  
い部屋ローンクの光だけ間に  
浮かん見え、仏殿があやしく金  
色に輝き、暗い森林の奥深くより  
日々斜め赤々と小道を照らしていく  
た。

時計がせいよく七時を示す。  
やがて一時、母は静かに向面圓  
じに腰を下す。大衣をほみ  
だす。社長の意に自分が付  
けられたことをほりつけられると  
少し良さげだぞうですね。良ね  
弊社は、社長の意に自分が付  
けられたことをほりつけられると  
少し良さげだぞうですね。良ね  
良お前が守ってくれ。わづ  
と強い人間に守れ。良一これ  
父をゆるしてね。……町の主が  
私はいた武者之外に出た  
私のいた武者之外に出た  
の町を一望して此の住  
居の夜の空氣に懸念を擡げて  
いた。懸念せらる天  
は雲のまことに示出来ぬ事  
海の孤島に大きいかね寄す  
はちがつて、私の小心には  
そして胸済から然然と湧き上  
波に身がすっぽり飲まれた  
気がした。

走れメロス

二年 翁 藤 良 子

心の彼方へは、底草者  
娘の七日に大きなままで、月  
える。これが神から  
杯ならば、よしんば  
くても殺されぬ飲み  
ばいがな、……  
いた私の心へ、再び今  
反射して笑を染めゆる  
せ・「まわじ。まわら  
人生無情なり。」  
ことじとくに、  
いつに生を喰らひして味わ  
ある。だがそれと同時に  
どうかこの凶縁をも実か  
味わなればならぬがな  
メロスへ、あなたは振り  
い。さしまでもを信した  
信へ、正義の刃に戦った  
間ひとと生れたその人  
ことじとくに、私はま  
美うござなれ。

かがれ  
水乱じん  
思ひなかつたんだ。  
思ひなかつたんだ。  
セリヌンティットの友達も  
の誠実さを欠いたまは成立しな  
し、美しくもない。セリヌンティ  
ウスがメロスの娘を殴り、メロ  
セリヌンティットの娘を、互  
ちうつの間で殴合わなか  
つたので理由で殴合つたので  
聞えども。どんなに快い響を  
つた力強い音だつたのに。空港  
こだましたことだらう。  
メロスナ、あなたは、あな  
を書いてくれた人の想像豊かな  
作者はどんな人に作られたかつ  
てことか。それでも物語が信じ  
せないままだったのだ。そして  
しみ、苦しみの果てに自らの手  
自らを断つたのだ。

で苦きただたく持音にスイ互  
良く学び・良く遊べ  
洋品百貨  
菊宏  
TEL. 793  
萬年筆  
ヤ  
363

## 死刑台のエレベーター Ascenseur poor l'echafaud

☆ 全面に波打つ素晴らしい超近代センス!  
☆ 20世紀の映画史に画期的な一頁を記録  
☆ したフランスの天才  
☆ 25才の監督ルイ・マルの輝かしき第一作  
☆ 本広告切抜き持参の 暖房 中劇  
☆ 高校 生限 5 5 円 完備

参考書なら  
鴻文堂

TEL 121

御贈答用に  
眼鏡・萬年筆  
力モヤ  
TEL 363

良く学び・良く遊べ  
洋品百貨  
**菊宏**  
TEL. 793